

はじめに

ブラジルはカトリックの国だと考えられてきた。ポルトガルによる「発見」以降約500年の間、その地に住む人々の多くがカトリック信者を自認してきたからだ。たしかに国勢調査では、国民に占めるカトリック信者の割合が1980年まで90%以上を占めた。しかし、その後、カトリック人口は急速に減少し、2010年には約65%になっている。今、ブラジルの宗教は大きな変動の渦の中にあるといえる。

こうしたなか、天理教をはじめ日本から進出した宗教がブラジルでも受容され、その変動の一部を担っている。本稿は、日本から渡った宗教がブラジルの宗教風土にどのように受容され、組み込まれているのかを考察する。はたして日本の宗教はブラジルの宗教風土を変動させているのだろうか。あるいはその風土の中で自らを変容させているのだろうか。

ブラジルの誕生と宗教風土の形成

15世紀のおわり、南北アメリカ（以下、アメリカスと表記）に渡ったスペイン・ポルトガル人らは、その土地と人々を収奪し、植民地事業とともにキリスト教伝道を展開した。住民を蹂躪しつつもカトリックに教化するという「剣と十字架」の歴史が開始したのである。1500年にポルトガル人が到達した場所は現在のブラジル北東部バイーア州ポルトセグーロで、ベラ・クルス島（真実の十字架）と命名された。

1494年、スペイン・ポルトガルの両国王はローマ法王の名の下でトルデシーヤス条約を締結した。カトリック教会の認識では、同条約で定められた境界線で世界を縦に二分して、両国がそれぞれの地域を統治することが正当化されたのである。条約では未だその存在さえ知られていなかったブラジルの最東端から現在のサンパウロ近くまでがポルトガルの領有地になると決められていたのだ。

そもそも植民者らの最大の関心は金の発見にあった。現在のメキシコやペルーといった金銀が採掘されたスペイン領と異なり、植民地初期のポルトガル領では輸出に耐える産品は見当たらず、現在のブラジル北東部沿岸地域で採取される「ブラジルの木 (pau-brasil)」が赤色染料の原料としてヨーロッパにかけ運搬される程度だった。国名となったブラジルは、この木の名前に由来する。真っ赤に燃える炭火を意味する名詞「ブラザ (brasa)」の形容詞形が「ブラジル (brasil)」なのである。

植民地事業が始まると先住民は収奪され、労働力不足を補うために多くのアフリカの人々が奴隷として売買された。彼らは後に開拓されたサトウキビ・プランテーションでの過酷な労働力としてのみならず、大農場主の邸宅の下僕や下女として使われたが、自らの力で人としての尊厳を守っていった。すなわち、アフリカから持ち込んだ自身の宗教によって悲惨な状況を乗り越えていったのである。現在、彼らが継承したアフリカの宗教はカトリック信仰や先住民の信仰と混淆したアフロブラジリアン宗教になった。概してアフリカ文化は宗教文化のみならず、音楽や料理などの様々なブラジル文化を支える極めて重要な要素になっている。とりわけ宗教文化では、カトリック信仰を表層とすれば、基層の宗教として、アフリカ系のみならず広く一般の人々に受け入れら

れている。カトリックを名乗りながらも、アフロブラジリアン宗教の拠点に足を運んでいる人が少なくないのである。

さて、植民地初期からブラジル経済の中心は、サトウキビ・プランテーションが盛んな北東部だった。18世紀にミナス・ジェライス州で金鉱山が発見されゴールドラッシュが起こると、中心は南西部に移動した。1763年には植民地行政がバイーア州サルバドールからリオデジャネイロに移った。リオデジャネイロ州の北に位置するミナス・ジェライス州の町々には18世紀以降に建造されたバロック形式の豪華絢爛なカトリック教会が多数現存する。それは、植民地期にポルトガル政府が当地の産業への投資を禁じたため、鉱山開発の利益が華やかな宗教建造物に費やされたからである。ブラジルでミナス・ジェライス州の人々が信心深いと言われる理由は、こうした歴史によるところが大きいだろう。

ブラジルは1822年に帝国として独立した。帝政はアメリカスで最後まで続けられた奴隷制を1888年に廃止したことで大農場主という支持基盤を失い、1889年に共和制に移行した。奴隷制廃止に至る背景には軍の青年将校を中心とする実証主義者らの思想的・人道主義的観点からの奴隷制批判もさることながら、資本主義国として君臨していたイギリスの存在があった。イギリスの資本家らは経済的観点から市場拡大を目論んで奴隷制廃止に圧力をかけたのである。現在、リオデジャネイロには社会学者オーギュスト・コントの思想が反映された人類教実証主義教会がベンジャミン・コンスタント通りに残されている。今は細々と活動を続ける程度だが、共和制への移行期、ギリシャのパルテノン神殿を思わせる立派なファサードを持つ教会でブラジルの近代化が熱く語られたのだ。

奴隷制が廃止される頃には栽培の主流作物はサトウキビからコーヒーに移り、スペイン、イタリア、ドイツなど、ヨーロッパからの移民を労働力として受け入れ、主に南東部のサンパウロ州およびパラナ州を中心にコーヒー栽培が進められた。その後ヨーロッパ諸国と移民の待遇を巡って対立した結果、第一回目の日本人移民が1908年に受け入れられ、やがて彼らを通じて日本の宗教がブラジルに伝えられるようになった。

新宗教のブラジル伝道

本稿が取り上げる宗教は、天理教、生長の家、パーフェクトリバティー教団の3つである。天理教は、日本の宗教のブラジル伝道の老舗教団として日系人中心に広がっている。生長の家は天理教同様、戦前は日本人に受容されていたが、戦後非日系人信者が増加して非常に知名度の高い宗教になっている。戦後、伝道を開始したパーフェクトリバティー教団も非日系人信者の割合が高い。これら3つの宗教は、伝道開始時期のみならず教えの特徴に違いや類似点がみられる。各教団の独自性と共通性をブラジルの宗教風土を通して浮き彫りにしたい。

最後に、新宗教という用語について少し説明しておきたい。本稿で取り上げる教団はマスコミ等で新興宗教として表現されることが多い。しかし、宗教研究者の間ではその用語が当該教団の宗教的価値を低めるものと理解し、新宗教という呼び方を採っている。本稿の用語法はこれに従うものである。